研究生活を振り返って

鵜　月　裕　典

私が最初に研究者になりたいと思ったのは、小学生の時です。当時放送されていた大河ドラマがきっかけでした。尾上菊之助扮する源義経の人生に一つのロマンを感じたのです。それで私は小学五年生の時に、源氏についての論文を書いたのですが、その主題は義経ではなく頼朝でした。義経の人生は判官贔屓な日本人の哀愁をそそるものですが、私はむしろ武家政権の基盤を築いた頼朝の政治手法に関心を抱いたのです。これは当時の担任の教諭にとても褒められました。思えば私の史学者としての素養はこの頃に芽生えていたのかもしれません。

もう一つ、小学生の私の興味をとらえたのが、図書館で見たアンコールワットの写真です。その壮観さもさることながら、一度は忘れ去られながらも再度その価値を見出された経緯に歴史の面白さを感じたのです。私は自身の研究生活を通して、「一度は歴史的評価が定まったものに対する再解釈」をテーマとしてきました。振り返るとこのテーマに至った原点は当時興味を抱いた頼朝とアンコールワット、この二つの物語にあった気がしてなりません。

史苑（第七六巻第一号）

研究生活を振り返って（鵜月）

進路を決める高校三年生のときも、幸いなことに歴史への興味は失っていませんでした。ところが当時の進路指導担当教員に「私は文学部史学科に入学して、いずれは研究者になりたい」と話したところ、床に転がって大笑いされました。「鵜月はそもそも学校に来ない。たまに来たと思えば必ず寝ている」と言われるような生徒だったので、それも当然だったかもしれません。両親も「文学部になんて行って就職できるのか」と心配しました。そんな反応にもめげることなく、私は初心を貫き、立教大学文学部史学科に入学しました。

もっともその頃はまだ研究テーマも明確でなく、ゼミは女子が一番多かったアメリカ史を選びました。その後自分の研究としては、大塚久雄先生に触発され、卒論ではアメリカ都市労働民衆史を取り上げました。しかし、ゼミの選び方が選び方だったものですから、修士課程の時にアメリカ史研究を進めていく自信を持てなくなりました。悩んでいても仕方がないと思い、私は思い切って大塚久雄先生や斎藤真先生の研究室を訪ね、自らの亡羊とした思いを相談しました。突然の訪問で先生方には多大なご迷惑をお掛けしてしまったと、自らの手前勝手な行動を今でも反省しています。しかし両先生とも、私のわがままな悩みに、真摯に応対してくださり、「悩むものは悩め、結局自分が答えを導く以外にはないのだ」と厳しくも暖かいご指導を頂きました。両先生に相談しても、悩みが解決したわけではありませんでしたが、とにかく自分で努力する以外には道はないのだということを、はっきりと自覚することができました。もちろん、簡単に自らの研究領域が見つかるはずもなく、ただただ悩み苦しむ日々が続いたことを覚えています。

結局、答えは見つからず、自分の中途半端な姿勢に嫌気が差した私は、飲み屋の帰りにゼミの指導教

授であった富田虎男先生に泣きついてしまいました。そんなときに富田先生が渡してくれたのが一冊の本です。都市労働民衆史に関する難解な原書で、二週間ほど英語と格闘しました。しかしその時の読後感は今でも忘れられません。論文を書く意欲が、あたかも自分が研究者の仲間入りをしたような充実感が、ふつふつと湧き上がってきました。そして、マイクロフィルムを必死で読みながら、何とか都市労働民衆史のテーマで修士論文を書き上げることができ、一定の充実感を持つことが出来ました。大学院時代には、東大や一橋大の院生たちと深く付き合い、共に将来の夢を語り合いました。様々な共著も執筆しました。

その後、博士後期課程の途中でしたが、一九八八年に札幌学院大学に職を得たことで、生まれて初めて東京を離れ、産まれたばかりの長男と共に氷点下の雪中暮らしを始めました。札幌で得た大きな出会いがアイヌ民族です。本州で生まれ育ち、あまり「民族」の存在を意識することがなかった私にとって日本にも先住民が存在するという当たり前の事実を肌で感じることができました。アイヌ民族との出会いはそればかりか、私の研究にも大きな影響をもたらしました。先述したようにそれまで私の研究の主眼は都市労働民衆史でしたが、アイヌ民族に出会ったことで、同じように悲惨な歴史を持つ米国の先住民であるネイティブ・アメリカンから見た歴史にも目を向けさせられたのです。特に明治政府によるアイヌ政策に米政府のネイティブ・アメリカン政策との類似性を見出し、自分の専門分野の軸足を富田先生の専門でもあるネイティブ・アメリカン史へと切り替えていきました。富田先生に札幌にお越しいただいては、そのご指導の下で共に史料を分析、調査する充実感を味わいました。こうした経験を通じて、ネイティブ・アメリカン史研究を一生の仕事と定めることが出来ました。札幌での六年間の研究生活は

研究生活を振り返って（鵜月）

充実した日々でした。

また札幌では、同年齢で生涯の友人となる菅原秀二君と出会いました。彼との思い出を振り返るとなぜかゴルフ場やすすきのの風景ばかりが思い浮かびますが、本業の研究においても彼から大きな刺激を受けたことは確かです。彼との長年に亘る変わらぬ友誼は私の人生の財産です。

その後、一九九四年に立教大学に赴任し、本学に戻れた喜びを噛みしめながら、張り切って仕事をしていましたが、その五年後に多発性硬化症という思わぬ難病に罹り、入退院を繰り返す生活になってしまいました。同僚諸氏や学生諸君には大変なご迷惑をお掛けしたことを、この場をお借りしてお詫び申し上げます。そのようななかで二〇〇七年に私の研究生活の集大成である唯一の単著『不実な父親・抗う子供たち－一九世紀アメリカによる強制移住政策とインディアン』（木鐸社）を上梓でき、これにより二〇〇九年に本学より文学博士号を頂けたことは、望外の出来事でありました。

末尾にはなりますが、何かと制約の多い私に対して、本学の先生方、職員の方々および学生の皆様からは、多大なるご支援を頂きました。残念ながら紙幅の都合上、これまで数々のご厚意を賜った皆さま全員のお名前を列挙することができませんが、深く御礼申し上げます。さすが本学はキリスト教に基づいた博愛精神に溢れた大学であると実感しているところです。特に常に私の研究の道標であった富田先生および本学の大先輩である小井高志先生には、心から感謝申し上げます。また病身の身にあった私を常に支えてくれた家族にも感謝しながら、筆を置きたいと思います。

人生の残り時間でどれだけのことができるか分かりませんが、私なりに精一杯努力して参りたいと存じます。二一年間に及ぶご指導とご鞭撻、本当にありがとうございました。

（本学文学部前教授）